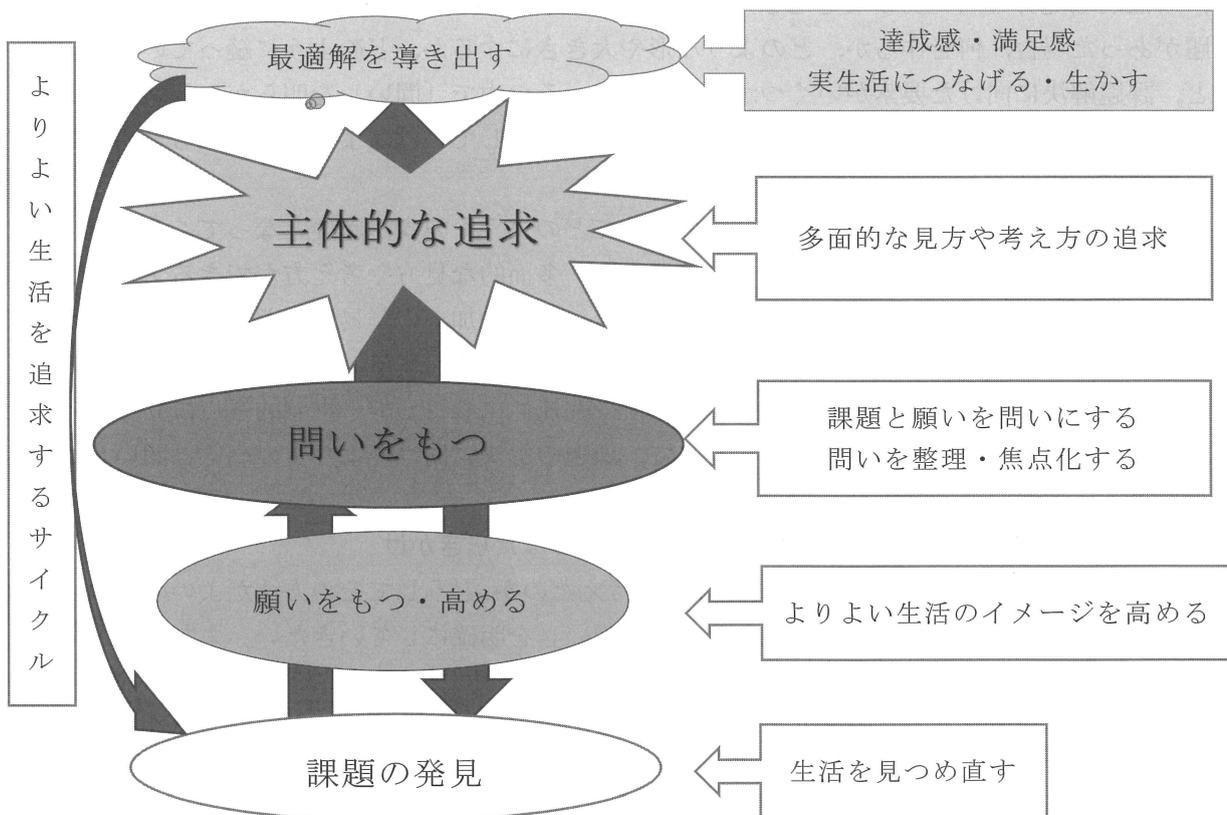


1 技術・家庭科における「問いをもち、主体的に追求する姿」

技術・家庭科では、実生活の中から課題を見出した時に、生活をよりよくしたいという願いを叶えるために、どうすればよいか考える中で「問い」が生まれると考えている。例えば、最近食事の栄養のバランスが悪い、家族が使ういすが壊れてしまって困ったなどの課題に対して、もっと栄養のバランスのよい食事をしたい、便利ないすが欲しいという願いをもったときに、『どうすれば栄養バランスのよい献立を立てることができるだろうか』『どうしたら丈夫で便利ないすがつくれるだろうか』というのが最初の問い（題材を貫く問い）となる。

これらの『課題』『願い』『問い』が子どもたちの中で太くつながった時に、主体的に追求する姿が表出してくるのではないかと考える。



2 「問いをもち主体的に追求する姿」を求めて

○ 主体的な追求をするための土台づくり

～「課題」「願い」「問い」を太くつなげる対象との出会い～

実生活へつながる学習にしていくためには、日常生活の中から「課題」「願い」「問い」を見いだしていくことは必要不可欠である。生活を見つめ直すことによって見いだされた「課題」、よりよい生活を目指したいという「願い」、課題を解決したり、願いを達成するための「問い」を子ども

たちが明確にもつことで、追求への方向性（学習のねらい）をつかんだり、意欲を高めたりすることができる。技術・家庭科では、このような主体的な追求をするための土台づくりをまず一番に大切にしていきたい。

この土台を太くつなげるためには、題材の展開の中で、どの場面で、どのような学習の対象との出会いを仕組むかがポイントとなってくる。自分の生活をじっくりと見つめ直すことで見いだしていくのか、あるいは、知識や技能を習得した上で実生活につなげていくのか、発達段階や学習の内容に応じて工夫していきたい。

○ 多面的な見方・考え方の視点を明確にする

実生活の中の課題を解決し、実践するためには、多面的な見方・考え方の中から自分の生活に応じた最適解を導き出す必要がある。私たちは経済性や効率性、環境性や素材の特徴、あるいは個人や家族の嗜好や価値観など、様々な要素を関連付けながら日々生活している。よって、子どもたちが現在あるいは将来よりよい生活を目指す上で、課題を多面的にとらえ、解決していく力の育成を重点として今年度も取り組んでいきたい。

小学校段階では、課題に対してその解決に向けてどのような要素（内容や条件）が必要となるのか、多面的な見方や考え方ができるようにしていく。例えば、「生活に役立つ物を作ろう」という課題があった場合、何を作るか、どのような形や大きさにするか、どのように縫っていけばよいかなど、課題解決に向けた要素がいくつか挙げられる。その中で「問い」を明らかにし、その問いの中から、課題を解決していくためにはどの「問い」を追求していけばよいか選択する場面を設けて、学習を展開していく。

中学校段階では、課題に対してその解決に向けてどのような要素が必要となってくるか見いだした上で、各要素間の相互依存性や関連性に着目して、多面的な見方や考え方ができるようにしていく。例えば、技術分野の製作で材料を選択する場合、強度や加工の難易度などの特徴を考えた上で、プラス面とマイナス面、時間経過による影響などを踏まえて検討する。課題を解決するための「問い」を選択するだけにとどまらず、相互の依存性や関連性に着目して、批判的視点に立って考えたり、作品全体と各要素の関わりを考えたりして、課題の解決に向けてより質の高い「問い」が導き出せるように学習を展開していく。

○ 子どもが考えを広げたり深めたりするための教師のはたらきかけ

主体的な追求を目指すために、なぜそのように考えたのか、どうしてその方法がよいのかなど「掘り下げる」はたらきかけを行い、子どもたちの「問い」を明確にしていきたい。また、子どもたちが課題の解決に向けて、様々な要素の依存性や関連性に着目するためには、教師から「提案する」はたらきかけが重要となる。子どもたちが導き出した要素を取り上げ、依存性や関連性などの考える視点を提案することで、質の高い「問い」を導き出していきたい。また、学習の成果を振り返ることで新たな「問い」が生まれたり、「問い」の質が高まったりする。授業ごとの、あるいは、自分の生活と関連付けながらのふりかえりを大切にしていきたい。子どもたちが生活の中で課題を多面的にとらえ、課題に対する問い方を身に付けながら、よりよい生活を目指して工夫し創造できる力を育てていきたい。

（文責 竹吉 昭人）